

「文学から「外」へ開く— —金沢・能登における文学の風景と文化について」

担当教員名 竹本 研史・杉戸 信彦

コース概要

日程	2017年8月22日～25日
場所	石川県金沢市・七尾市・志賀町
参加人数	16名

コースのねらい

本企画は、泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星という、3人の文豪を輩出した金沢など、文学作品の舞台に選ばれることの多い石川県をフィールドにして、文字によって表象される世界と、実際に自らが現地で見える風景とのあいだで、どれほど差異があるのかをとくに着目することによって、文字芸術の可能性を問い直すことを目的としています。

内容



初日は、新潟大学人文学部津森圭一先生による「風景」に関する講義も聴講しました。



映画版『ゼロの焦点』で舞台となったヤセの断崖。作品の時期とは違い、夏ですが、日本海の荒波と強い風が織りなす能登半島西岸の自然の峻厳さを肌身で感じています。



1820年創業以来、そのままのかたちで残されている、ひがし茶屋街のお茶屋「志摩」。従業員の方からお茶屋文化についてのお話を伺いました。

初日は、泉鏡花、徳田秋聲、五木寛之、古井由吉らの作品舞台となった、浅野川流域を散策し、事前学習で分析した文学作品による表象と、自分たちがまさに目撃している風景との差異について検討しました。また、徳田秋聲記念館では、学芸員の方に、徳田秋聲とその文学作品の全体像についてレクチャーを受けてさらに理解を深めました。

2日目は、能登に関する泉鏡花『山海評判記』と松本清張『ゼロの焦点』との表象の差異を念頭におきながら、能登半島東部の和倉温泉と西部の能登金剛（巖門・ヤセの断崖）をまわりました。とくに、能登金剛では、清張の描く冬の厳しい自然を想起しながら日本海を望み、バスのなかでは、地図と『ゼロの焦点』を照らし合わせながら、清張の記述の矛盾点を確認しました。

3日目の午前中は、江戸時代より醤油の生産地として名高い金沢市大野町を訪れました。そこでは、醤油会社の社長さんから大野町の街並み保存についての取り組みを学びました。午後は、初日で歩いた浅野川流域と比較しながら、室生犀星、吉田健一、中原中也、井上靖らの作品舞台となった犀川流域を散策しました。妙立寺の建物内をめぐるながら、吉田健一『金沢』で幻想への入り口として描かれる必然性を実感したり、室生犀星記念館や雨宝院では、ガイドさんやご住職から室生犀星の人物像についてお話を伺ったりしました。



初日に歩いた浅野川河畔（左）と3日目に歩いた犀川河畔（右）。川自体の雰囲気も双方で異なっていることがわかります。

4日目は、吉田健一『金沢』の舞台である成巽閣と、多くの文人たちに愛された兼六園を訪れました。成巽閣では、建築構造とマリンプルーの群青の間に目を見張りながら、吉田の「西洋」について考察をめぐらし、雨の兼六園では、文人たちがそれぞれ取り上げた場所の違いについて、それぞれの作品の描写を思い出しながら、しばし思案にふけりました。

レポート課題として、学生たちが毎日つけていた「振り返りシート」に記された記録に基づき、改めて金沢・能登を舞台にした文学作品を分析し、各自が実際に目にした風景との差異について考察しました。事後学習では、各人のレポートをめぐり、活発な議論がなされました。なかでは、現実の風景が、事前学習の際に文学作品を通して想像していたものと類似していたとする学生、あるいは逆にまったく異なっていたという学生もあり、かつその差異についての評価も正反対だったケースもありました。

学習を終えて

環境問題を考える学部にいる上で、風景というものはあまりにも身近なもので、あまり深く考えることはありませんでした。風景を通して無意識に感じる五感の喜び、そこから蘇る過去の記憶、そういった無意識の感動を改めて学びの観点からアプローチすることができました。とても貴重な体験でした。

2年 岡崎 元哉

同じ場所でも、記憶に残るその場所の風景は、人それぞれ違うということを強く実感しました。

訪れた中には、重要伝統的建造物群保存地区のひがし茶屋街もありました。今も昔も変わらぬ風景を残し続けることで、作品内で著者が表現する風景と、自身が実際に感じた風景との差異がよりリアルに感じる面白さを知ることができ、また様々な作品の舞台となる現地への興味も強まりました。

3年 酒井 理絵



2日目の巖門にて集合写真